



見えない力「非認知能力」の大切さ

校長 竹谷 浩一

「Well-being（幸せ）を保障する教育」の実現を目指して
～エージェンシーを発揮し、幸福な人生と豊かな社会を自ら作り出していくために～

※エージェンシーとは、「自分の頭で考え、自分で決めたことに責任をもち、目標を立てながらそれを達成するために最後まであきらめず行動する力」であり、さまざまなことに挑戦し、成功と失敗を繰り返す中で培われるもの。

これは「日本一の教育都市」で「日本一幸せな子ども」をはぐくむことを目指し、さいたま市教育委員会が掲げたスローガンです。私たちの未来がAIに代替されることなく、一人ひとりが他者との関わりの中で「幸せ」と「豊かさ」を追求できる人間を中心とした社会の実現につなげるねらいがあります。これからの社会において重要なキーワードは「共存」だと思います。

私がまだ学生だった頃、「見える学力（認知能力）」である、テストの点数や検定の級といった数値化できる学力が重要視されていました。（今もそうかも知れませんが・・・）確かにテストで高得点を取ったり検定の級を上げたりする努力によって、進路が定まり自分の目指すゴールに近づけたのも事実です。しかし近年、予測困難な、誰も見たことのない世界を生きるには「見える学力」だけでは不十分で、学びに向かう力、ものごとをやり抜く力、他者との関係の構築、自制心といった「見える学力」の下支えとなる「見えない力（非認知能力）」が重要であるとの見解が示されています。

昔から、「結果を出せ。結果を出さなければ意味がない。」とよく耳にしますが、中長期的に捉えてみると、結果に至るまでの過程（継続的に、粘り強く、最後までチャレンジし、自分の考えを発信し交流する など）が、その後の子どもたちの成長に大きな影響を与えると感じます。

では、この「見えない力（非認知能力）」をどのようににはぐくめばよいのでしょうか。諸説ありますが、幾つかの方策を紹介します。学校、家庭、地域が人の輪を作り、子どもたちにアプローチすることで効果が期待できます。以下の主語は全て「私たち大人が（は）」となります。

- 子どもが興味をもったことは積極的に応援する
- 「子ども自身が決める」という経験をさせる
- 失敗しても前向きな声かけでサポートする
- 大人の価値観を振りかざすことなく、子どもの話に耳を傾ける（先に正解を言わない）
- 頑張っている経過を褒める 等

私たち大人も正解が分からない世の中がしばらく続きそうです。子どもたちが自分の頭で考え、自分の言葉で発言する場面を大切にしながら、何が一番居心地良いか共に考えていきたいものです。

校長のつぶやき

9月17日(水)の埼玉新聞に「親子でつくる思い出～西浦和小創立60周年、PTAが夏祭り企画～」の記事が掲載されました。8月30日(土)の祭り当日は猛暑日で参加者の体調が心配でしたが、大きな事故等もなく地域の関係諸団体をはじめ多くの支援者に支えられた素晴らしいイベントとなりました。企画・運営等に関わってくださった皆さん、本当にお疲れさまでした。

私にとって参加した子どもたちとその保護者、地域の方たちの笑顔に癒された時間でした。